

議 事 録

会議名	令和7年度第2回寒川町自殺対策計画推進協議会		
開催日時	令和8年2月17日(火) 午後1時30分～午後2時45分		
開催場所	本庁舎3階 議会第2会議室		
出席者名、 欠席者名及び 傍聴者数	出席者：桑原委員、佐藤委員、森井委員、小西委員、三留委員、町田委員、野口委員、沼澤委員、稲葉委員、大川委員 欠席者：伊吹委員、本間委員、小林委員、守村委員、 事務局：菊地町民部長、瀬戸町民窓口課長、三留町民窓口課副主幹 傍聴者：なし		
議題	(1)「支えあい、こころつながるまち第2次さむかわ自殺対策計画」令和8年度事業計画について (2) その他		
決定事項	・議事録承認委員は、輪番制 今回は、佐藤委員及び森井委員が務めることを確認		
公開又は 非公開の別	公開	非公開の場合 その理由（一部非公開の場合を含む）	
議事の経過	<p>1 開会 瀬戸町民窓口課長</p> <p>2 あいさつ 瀬戸町民窓口課長</p> <p>3 議事録承認委員の指名 承認委員は輪番制。今回の承認委員は、佐藤委員及び森井委員が務めることに決定する。</p> <p>4 議題 (1)「支えあい、こころつながるまち第2次さむかわ自殺対策計画」令和8年度事業計画について、事務局より説明</p> <p>【稲葉会長】 ありがとうございます。まず、プロフィールと令和8年の事業計画が事務局より示されました。それでは、委員の皆様からご意見、ご質問等を頂戴したいと思います。よろしく願いいたします。</p>		

では、桑原委員、よろしくお願いいたします。

【桑原委員】 事業計画のほうで確認といいたいでしょうか、昨年度の令和7年度の事業計画と比較して見てみまして、寒川町の生きる支援の関連施策の8ページの自治会活動支援事業の中の2ですが、これ、昨年度はスマホの教室をするということがたしか入っていたと思うのです。前回の会議のときに、随分IT化が進んで、高齢者でも非常にスマホの普及率が今増えてきている。ただ、私は使えないのです。

ですから、そういった情報格差みたいなところで、スマホをなくすと大変なことになるわけですが、スマホを通じたいろんな犯罪とか、そういうことも起こっていますし、そういう意味では、スマホ教室というのは非常に大切ではないかということをお前の会議で申し上げたと思うのですが、今回それが抜けているのですよね。そこがどうなのかということが1点。

それから、ここの中に例えば、9ページですと11、12ぐらいのところに実施済みって書いてあるところがあるのです。これは、実施済みということは、必要に応じてというふうに書いてありますけれども、続けてやらなくてもいいというふうに考えているのかどうか、そこだけ確認させていただきたいと思いません。

【稲葉会長】 事務局、お願いします。

【事務局】 2番の自治体活動支援事業なのですが、スマホ教室をやるかどうかにつきましては、今、情報がない状況でございます。申し訳ございません。

それと、11番の社会福祉協議会補助事業で、社会福祉協議会職員のゲートキーパー研修を行うということで、令和7年度に実施済みということで、これからやるのですが、今回は実施済みということになってはいますが、8年度は未定でございます。状況に応じて検討するというので、8年度については未定でございます。

福祉課の令和6年度に実施済みということで、こちらにも実際に昨年度に開催したのですが、人員体制の実情に応じて、8年度実施するかどうかを検討するというのでございます。よろしくお願いいたします。

【桑原委員】 意見なのですが、特にゲートキーパーは本当に大切な事業ですね。そういった意味では、ぜひ、実施が済んでいるというのでなくて、引き続き取り組んでいただくということをお願いしたいと思います。

【事務局】 はい。分かりました。

【稲葉会長】 小西委員、お願いします。

【小西委員】 すみません。私から質問というか、確認なのですが、1ページの3-5のアンケートの実施というのがこちらありますが、前回、パーセンテージにすると、かなり少ないアンケートだったじゃないですか。今後アンケートを行う方向、とてもいいと思うのですが、そこから実態とか状況が見えてくるので、それはいいことだと思うのですが、今後アンケートをどのような形で行う予定なのかということと、あと、いろいろ子育て支援相談事業とか障害者の相談、子育てとか障害者の相談事業とかありますけども、こちらのほうなのですが、その事業を行うに当たって、この相談件数が増えているのかどうか。年々増えているのかというのを知りたいなと思いました。すみません、分かる範囲内で結構です。

【事務局】 では、アンケートですが、今後、インターネットを使ってアンケートを実施したいと思っています。紙で出すと、届いた方はびっくりしてしまう内容かなと思いますので、自殺対策についてのアンケートはウェブでのアンケートでやりたいと考えております。

人数が少ないということですが、eモニター制度というのを町の企画政策のほうで行っているのですが、登録者も増えていますので、そちらを活用させていただいて、実施したいと思っています。

時期は、計画の改定時期と、あと、間隔が開かないでやってしまうと、回答を得にくいということですので、少し間隔を開けて実施していきたいなと考えています。

【小西委員】 寒川町、女性の場合、20歳代の人が一番多いということだったので、子育てで悩む人がいるのかなとか。

【事務局】 そうですね。件数は、子育て支援センター事業、延べ4,000件ぐらいというふうになっていまして、これは令和6年度の状況なのですが、前年の比較がないのですが、延べ1年間で4,000件ということで。

【小西委員】 結構あるんですね。分かりました。

【事務局】 受けた相談全てに相談者に寄り添った対応を行えたということで、相談に対してはきちんとケアを行えたということでございます。

二十歳の自殺者ですが、どういう状況の方なのかというのがここでは分からないのです。20歳代と書いてありますが、職業は分からないのです。

【小西委員】 ありがとうございます。

【稲葉会長】 ありがとうございます。子育て支援センターで相談に関わっておられて、町田さん、そのあたり現場の感覚はいかがですか。自殺対策のみにかわらず、全般的な子育ての相談ということでも構わないですけれども。

【町田委員】 実感として、支援センターに来る方でも相談したいのですと来る方ってまずいないのです。何でこれだけ相談件数が多いのかといたら、皆さん疑問に思われると思うのですが、何気なく来て、遊んでいる様子って、支援センターって親子で来る場所なので、どちらかという、家庭の中の雰囲気似ているところがあるのです。そういうときに、お母様の目つきだったりとか、例えば、支援センターは本棚もいっぱいあるのですが、そこで取った1冊の本のタイトルが、例えば子育てに悩みを持っている人が読むような本だったりとか、いろんなどころから、あれっと思うところが実はあるのです。

まだお子様が、支援センターは妊娠中から来られる場所なので、1か月しかたっていない、やっと外へ出られるようになったお母さんもすぐに来るとか、あとは、まだまだ赤ちゃんなのですが、保育園どこか入れたいんですけどって言ったり、本当にそういったささいなところからお話を受けていく中で、実はすごく今、夜泣きが苦しくて嫌だったりとか、御主人が全然協力的ではないであったりとか、あと、中には、今、御主人が自営業という方もすごく多くて、そういった中でなかなか事業がうまくいかない。

あとは、お父さんが育休を取る方がすごく増えて、支援センターも今1日に2人、3人とお父さんがいらっしゃるのが当たり前になってきたのです。私この仕事になってもうすぐ10年ですが、今までにはない感じだったのです。そのお母様も鬱っぽくなっている。一緒にやっているのですが、交代で子供を見るということができなくて。

【小西委員】 鬱になって。

【町田委員】 そうなのです。どう関わっていいのか分からない。2人して泣いている赤ちゃんを目の前に、こうやって広場で立ち尽くしているというようなことが実はあって、その中からお話を聞いていると、それがそのままに相談につながる。その相談内容というのは1つではない。いろいろなことが複合的に混ざり合っているのかなという気がするのです。

なので、20代の女性の自殺者数がすごく多い、これが妊娠中の方という可能性もあるし、産後鬱という可能性もあって、そこは無視できないなというのを今、話を聞いていて、つくづく思いました。所管としてはそういった状況になっています。

【小西委員】　　そういう時代なのですね。

【桑原委員】　　おっしゃるとおりで、なかなか、これだけ自殺対策進んではきている、自分1人だけで抱え込まないで、SOSが出せる教育とか、いろいろ言っていますが、まだまだ口に出せないのです。

【町田委員】　　そうなのです。出せる人はまだいいですよ。連絡ができて。LINEでも何でもいいのですが、出せる人はいいのです。出せない人、そこが一番、じゃ、どういうふうにそういう人たちに対してアプローチができるのかというところが一番問題で。

【桑原委員】　　町田さんは、でも、そういった意味ではいろんな状況を見て、上手に、何というか、そういった本音という、本当に相談したいことを出してもらったりということをやっていると思うのですが、いずれにしても、ゲートキーパーってさっき言いましたが、ゲートキーパーって別に職場でもそうだし、家庭でも、身近な人ですよ。例えば相談に来ている人なんかも含めて、そういう人の感度というのでしょうか、どうやって本当のニーズ、あなたのことを心配しています、話してください、どうですかとか、そういった声かけができるかどうか。

これがこれからすごく大きな課題ではないかと1つ思うのと、今、お話を伺っていて、実は育休の男性が増えてきているとか、そういった意味では、寒川町の今のところは女性も多いですけど、男性がやっぱり多いですよ。有職の男性が多かったりしますよね。

だから、家庭問題といっても、職場の問題だけとか家庭の問題だけでなく、1つの家庭の中にお父さんもいれば、子供もいれば、お母さんもいればということで、みんな連なっているわけなので、本人の問題じゃなくても、例えばお父さんが窮地に陥って困っているのだというときに、こういったところに相談できる場所がありますからとか、そういった情報提供をしていただくとか、そういったことも必要になってくると思うんですよ。とても、今、現場のお話を伺って、なるほどと思いました。ありがとうございます。

もう1点いいですかね。産後鬱とか、そういうので、この4ページに子ども、若者、保護者への自殺対策の強化ということが書いてあるんですが、ここにはきちんと、対象の希死念慮の有無などを確認しながらと書いてあります。これ本当大切なことなのですが、担当者にとって大変な負担になると思います。

「死にたい」と言われたときに、じゃ、どう支えるのかとか、そういった意味ではね。

だから、ぜひこれを実現していくためにも、担当者を支えるというのでしょうか、そういったことも少し念頭に置きながら、担当者の方がやればいよと

ということじゃなくて、お互いにネットワークをうまく活用して、どうお互いに振り分けをしたり、支えていったりしたらいいのかということですね。

特に、自殺企図者、自殺念慮とか自殺企図がある人なんていう場合は、医療との連携がすごく大切となりますので、そういったことも少し念頭に置きながら、町としてのネットワークを補強していくということが必要かなと思います。

【稲葉会長】 ありがとうございます。では、子ども関連をお聞きしましたので、高齢部門で佐藤委員、相談に乗っているところで、全般通しての課題等でご提案等あれば教えてください。

【佐藤委員】 そうですね。先が見えない介護というところで抱え込みというのは、やはり介護者の人がまいってしまうというのは聞かれます。心のバランスを崩して、一家世帯で困ってしまうというのは散見されますね。

おっしゃったとおり、SOSを出せただけは本当すばらしいというところは、本当によくご相談いただきましたねというような、寄り添う姿勢は大事にしていくような形にはしていますね。

【稲葉会長】 そのほかいかがでしょうか。

【小西委員】 今、佐藤委員が寄り添うのが大切だと。私もそう思うのですが、なかなか、鬱の方って接し方がとても難しいのですよ、実を言うとね。鬱もいろいろな形がありまして、私が抱えていた対象者の方は、鬱もそうなのですが、時にはすごい被害妄想とか、そういうものに陥ったり、そのときそのときで状態が変わったりする。

佐藤委員たち、実際に接している方は大変だなと思うのですが、心の病んでいる人に接するというのは本当に難しく、私は民生委員として、この接し方というのは正解がなくて、そのときそのときの状況とか、その家庭の状況とか、いろいろあるので本当に難しいことがあると思うのですが、根気よく信頼関係を持つというのは、つい最近、私が行ってもすごく嫌な顔されて、来られたら困るなんて頑固に言っていた方が、ちょっとしたことでその親族の方とお会いして、その方とお話するに当たって何か打ち解けて、それからはずごく心よく対応してくれて、そういうちょっとしたきっかけなんですけれども、それがもし見つかると、自殺者も話せるような人が1人でも増えると常日頃考えているんです。すみません。ただ、難しいことではあると思うのですが、実際に自分が体験して、そう思いました。

【桑原委員】 おっしゃるとおりで、難しいです。

【小西委員】　　そうです。

【桑原委員】　　寄り添い方というか、心配の仕方というのが、かえってそれが負担になってしまうことがあるわけです。逆に、自分は迷惑をかけるばかりで何もできないとか、逆の取り方をされる場合もありますよね。

ただ、1人で全部やろうとすると本当大変です。だから、例えば具体的な問題で、こう困っていたらこういったところありますよとかね。相談先でいろんな緩いネットワークというのでしょうか、あんまり密な関係じゃなくてね。今はなかなか、ひと頃に比べると、地域の共同体というのがそのまま通用しないような状況が出てきていますよね。

子供会1つとってもそうかもしれません。あるいは町内会みたいな在り方というのもあんまり関わってほしくない気持ちと、それから、相談しにくい。どこまで相談していいかわからない。困っているのだけど、相談していいかわからない。そういった人との距離の取り方というのが難しい時代なので、そういう意味では、いろいろお世話というか、声をかければ、それだけ応えてくれるかという、必ずしもそうでもないの、その時は、自分がということよりも、具体的なことで、もうちょっといろいろな人にやってもらって、そして、その人が心を開けるようなネットワークみたいなものも考えていく必要があるのかなというふうに思いますね。

おっしゃるとおりで、本当に状態が悪いと、悪いほうに悪いほうに考えちゃいますのでね。だから、せっかく何とかしてあげたいと思ってやっても、それがかえってすごい負担になっちゃってということが起こりますので、その兼ね合いは非常に難しいと思います。

【稲葉会長】　　ありがとうございます。

私、このプロフィールを見させていただいて、自殺件数が多い少ないということではなくて、働く世代、高齢者、それぞれの人向けの対策というか、取組というのがとても大事なんだと、会議に出させていただいていつも感じております。

働く世代ということで、働く世代の方の最近の動向と課題を、野口委員、御紹介いただければと思います。お願いいたします。

【野口委員】　　私、藤沢労働基準監督署に所属していますが、藤沢監督署は藤沢市、鎌倉市、茅ヶ崎市、寒川町を管轄しております、私、藤沢監督署に約2年勤務した状況ですけれども、寒川町の印象を簡単に申し上げたいと思いますが、寒川町は運送業と製造業、あと、介護などの社会福祉といった業種が多いのかなと思います。運送業はやはり圏央道が開通してからどんどん、トラックだったり倉庫だったり、そういったものが増えてきている影響があるのかなと。

あと、製造業は、工業団地がありますし、あと、湘南エリアということで、介護などの社会福祉施設も多いのかなと思います。

これらの業種は人手不足の業種なんですよ。2024年問題、ドライバーはそういうのがありましたし、福祉施設は以前から人手不足と言われている業種ですし、製造業も最近、日本の若い人はなかなか就かなくて、外国人の方に入ってきてもらっているというような状況がやっぱり寒川町でも見受けられます。

人手不足の業種ということで、現在在籍している労働者の方が自分のペースで働いているのかな、あとは、お休みとかも取れているのかなという懸念がありまして、人手不足ですと、休んだら誰かに迷惑かけるとか、そういったことでなかなか本当は休みたいのに休めないみたいな、そういった状況になっていないかは今後も気をつけて見ていく必要があるのかなと思います。

2点目としては、最近の若い人の傾向ですが、スマホのアプリで仕事を見つけて、実際、採用面接とか行かずにアプリでやり取りをして、アプリで仕事の指示を受けるというケースがあります。例えば、ネット通販の配達業ですとか、あと食事の宅配、例えば、こういった仕事をしてトラブルになったときに、会社の事務所にも行ったことがないとすると、実態が見えないのです。

それで、例えば給料がトラブってもらえなかったというふうに相談に来られても、なかなか解決に結びつかないこともありますので、若い人を中心としたスマホだけで仕事を完結するような、そういった状況は気をつけないといけないのかなと思います。

もう1点、3点目ですが、令和7年度に入ってから、AIに相談して監督署に来られる方が増えた印象があります。AIがこう言っているから、これが正しいみたいなことを熱心に語るのですが、いや、こういう角度で考えることもできるのではないかとかというふうに対面の相談でアドバイスしても、なかなか聞く耳を持たないことがあって、非常にそこは難しいなと思います。

ですので、これから自殺対策の窓口でAIにいろいろ相談するという場面が増えてくるのかもしれないのですが、AIでこう言っているからこうなんだみたいな人に、対面の人たちがどういうふうに接していけばいいのかというのは、なかなかこれから難しい問題なのかなと思います。

私のほうからは以上3点申し上げたいと思います。

【稲葉会長】 ありがとうございます。いや、何か今の課題、とても考えさせられてしまいました。働く世代ですと、社会福祉協議会では生活困窮者の支援ということで相談を行っていったりするのですが、寒川町は福祉事務所設置自治体ではないので、神奈川県が生活困窮者の相談に乗っているのです。ほっとステーション横浜というところですが、そこを寒川担当いただいた職員の方全員退職、ストレスで辞められているのですよ。皆さん続かないで、辞めていかれ

る。そうすると、相談を受ける側のストレスというのも出てくると思うんでね。AIにされた質問をAIで回答する時代が来るのかなと、今、聞いていて思ったのですよね。職員も自分の頭で考え切れないというか、そういうところが出てくるのかなと。怖いですね。何か難しい時代だなと思って。

【小西委員】 そうですね。全て介護もAIでやるとかね、そういうのがありますね。

【稲葉会長】 アルバイト、就職も全部スマホで完結しますし、本社とのやり取りもなく、指示をもらって働く場所に行って、配達をして終わって、お金が振り込まれる。一切そこで人との対面のやり取りというのがないわけですよね。なかなか難しい世の中になってきたかと、つくづく今お話聞かせていただいて感じました。ありがとうございます。

全般になりますが、茅ヶ崎警察、大変全般に対してのご相談、ご支援をいただいております、最近の特徴等を教えていただければと思ひまして、また、あと、署員の方というのでしょうか、何かあると、問題があると今突っ込まれるというか、批判される世の中になってきていますので、働いている警察官の方のメンタルとか、そういった部分も含めてちょっと教えていただければと思います。

【沼澤委員】 まず、自殺の傾向ですね。これは手集計ですけど、昨年の令和7年度の集計をしたところ、自殺者、茅ヶ崎と寒川で14名。これ男女別で見ると、男が9名、女が5名。年齢別で見ると、10代が2人、20代1人、30代3名、40代2名、50代1名、70代4名、80代1名ということで、60代はいませんでしたけど、各年代にそれぞれの問題があったりする。

その手段が、何が多かったかというのを抽出すると、断トツ的に多かったのは首つり。首つりが7名。次、練炭と飛び降りが2名ずつ。これで11。これが自殺者の手集計になります。

自殺未遂がどれだけいるか、この因数がどれだけいるかというのを手集計で見たら、44名いるのです。これは今度男女が逆転して、男女比率が多くなるのは男性が12名に対して女性が32名。ここから若い世代から多くなって、10代が7名、20代が13名、一番多いですね。30代が8名、2番目に多い。この10、20、30代だけで割と大多数。40代3名、50代6名、60代3名、70代1名、80代3名。

手段を見ると、圧倒的に多い42名の自殺未遂に対して、32名がオーバードーズです。薬。でも、結果死んでいないのですよ。なかなか死なないのですよね。死にたくなって、一番やってしまうのがオーバードーズ。ある薬を飲んじゃう。

次に多いのが刃物ですね。階段みたいになっている人いっぱいいますけど。5名。早めに見つかった首つりが4名。なので、刃物と首つりは9名いますけど、自殺者のほうにすぐ変わってしまう可能性もあるので。

そんな結果が出ています。14名死んでいますけど、予備軍はもっといっぱいいて、44名。じゃ、その44名の若い世代なんかはこれからどうやっていくのか。見ていくと、精神疾患と特性ですよ。特性に苦しんでいらっしゃる方。生活困窮が多いのかなというふうに感じております。

警察のほうで人身安全事案ということで我々が取り扱っている児童虐待とか高齢者虐待とか配偶者暴力とかストーカーとか、そういった家庭内とかの問題で警察が介入することって非常に多いですね。茅ヶ崎は、人身安全関連事案は例年多いです。全神奈川県下54署の中でも多い。特に多い署。

昨年は取扱い件数だけでいくと、750件ぐらい扱っているのです、1日2件ぐらい、そういう扱いをするのです。配偶者暴力なり、男女間のトラブルなり、高齢者虐待、児童虐待とかというのを扱うのですが、その中で、家庭の中に入った原因を見てみると、鬱病とか精神疾患を持っているパートナーとのトラブルとか、そういうのがやっぱり多いですね。

本当にひどい人たちというのは、我々も23条通報をして、県の医療センターから措置入院、措置入院ができなければ、医療保護入院できないかということで、医療につなぐのですが、そこに至らない自傷他害が低いというふうに判断されたり、アルコールちょっと飲んでいたりすると、アルコールの影響だからということで23条に入らない人たちがいるのですよね。

そういう人たちをなるべく県に通報して、医療とか役所とか第三者に絡めながら援助を受けさせられるようにしなきゃいけないなというところで、警察のほうでは取り組んでいるのですね。

今言った相談を生活安全課の防犯係が対応するのですが、やっぱりストレスも多いので、場合によっては夜中まで働く場合も多かったです。人命の保護とか、対策取らなきゃやられちゃうという危険な状態もあったりするので、やはりみんな疲弊しますし、当直もありますしというところで、大変なので、なるべく休みを取れるようにして、抱え込まないようにしているというところですね。そんなところです。

【稲葉会長】 ありがとうございます。今、お話をお聞きしていて、警察の方は事を起こしてしまった後の対応ということで、件数等の御報告をいただいて、そこがメインになってくるのだと思うのですが、その業務の中に、死にたいんだということでの相談のお電話とかがかかってくるわけですよ。

110番をかけて、そういうことを言われる方もいられたりするのではないかなと思うのですが、そういったところの対応、ずっと相談乗っているわけには、やはり事件が起こったらそっちを解決しなきゃいけないんで、相談も受

けられないのではないかなと思うのですけども。

【沼澤委員】 医療につながるのですよね、なるべく。

【稲葉会長】 そうですよ。

【沼澤委員】 警察では専門分野じゃないので、心のケアをちゃんとしたほうが。

【稲葉会長】 そういう方って、まず警察に一報する方も多いのではないかななんて思うのですけれど。

【沼澤委員】 多いですし。ご家族からかかってくるトラブルで認知する件数も先ほどみたいに多いですね。

今、前みたいに、家庭内のこととかを通報しないという風習がなくなって、どんどん警察に通報するという世の中に変わってきているのです。さっきのAIもそうですけど、一昔前までは民事不介入なんて警察は言っていましたから、家庭内でのいざこざに入らなかったのですが、いわゆるストーカー殺人だとか、どんどんどんどん悪化していくので、家庭にどんどん入る。どんどん通報してくださいねというふうに変わっていくと、どんどん通報のレベルも下がって行って、彼女とけんかしました、落としどころが見つかりませんという通報とか、そういうのもしょっちゅうあって、750件ぐらいになるのですが、その中の割合を見ていくと、精神疾患を持っている人が多いなという実感があります。各年代で。

【稲葉会長】 ありがとうございます。

今日欠席の方も多いので、皆様一言ずつ御発言いただくかなと思っています。どうぞ。

【森井委員】 今聞いていて本当に身につまるというか、私自身もすごくきついなと思ったときがあります。言わずにいたら自分が壊れてしまうのではないかと震えるほど追い詰められたことがあり、とてもつらかったです。

しかし、そのつらさを聞いてくれる人がいたおかげで、心が驚くほど楽になりました。人に聞いてもらうことの大切さを強く実感し、「このまま黙っていたら自分がおかしくなるかもしれない」と感じたのは、この年になって初めてのことでした。家庭内の問題ではありませんが、そうした出来事があったのです。

本当にAIの相談の問題だとか、それから、町なんか総合窓口なんかが出てきて、民生委員でも御近所トラブルという相談が結構増えてはきています。

私の地区の住人ではありませんが、近所に住む方がある日突らうちに駆け込んできました。家庭内の問題が原因らしく、顔色が非常に悪かったので「どうぞお入りください」と言って1時間ほどお話を聞きました。精神的に不調の様子でしたが、話をするうちに落ち着かれ、最近お会いしたときにはずいぶん楽になっているように見えたので、本当によかったと思います。

その後のことはなるべく詮索しないようにしていますが、「どうしたらいいの?」と聞かれたら「とにかく全部話してごらん」と言います。私自身、誰かに聞いてもらってとても楽になった経験があるので、「何でも話していいよ」と伝え、相手は随分話してくれました。結果がどうなったかは追いかけないようにしていますが、何年かに一度電話をくれる鬱の方など、そうした経験は確かにあります。

訪問した相手がこんなに若い人だとは思いませんでした。離婚して生活が別になったようで、様子を見てみると顔色も悪く、「大丈夫かな」と心配になりました。片づける気力がなくなっているなどぼつぼつ話してくれました。私は「何でも話していいよ」「片づけなくてもいいよ」と軽く声をかけて、その場では落ち着いてくれました。後日、新しい担当者連れて一緒に訪ねたときはにこにこして会ってくれたので、その後は担当者に任せており、詳しい経過は分かりませんが、そういう経験をしたことがあります。

先ほど先生のお話にあったネットワークの件についてですが、私も「ほっとステーション」に参加したことがあります。そこでは心が苦しくなるような重い話が多く出て、皆で話し合っても「最後にどうすればいいか」という点で行き詰まることがよくありました。ただ、最近は警察が介入しやすくなってきたと聞き、そうした支援があれば少し前に進めるのではないかと感じたことがあります。

技術はどんどん進化していて、AIの問題についてはどう扱えばいいか分からず、答えが出ないと感じます。AIから得た答えを鵜呑みにして相談に来られたとき、それが正しいと受け取られると困ります。完全にAI任せでは私たちにできることに限界があり、何気なく話したことがどこまで受け入れられるのか分からない点に、少し怖さを感じます。

【桑原委員】 AIの問題は、医療現場でも多くなっています。

匿名性があるしね。知った人に相談するより相談しやすいわけですよ。先ほどの警察の沼澤さんのほうからお話があって、警察にそれだけでも相談が行って、いろんな形でSOSが持ち込まれて、そこで対応していただいているというのは、さっき当初は民事不介入で、今はそうではない、それだけ公的機関のほう割合安心して、見ず知らずの他人よりも、関係の薄い他人よりも、そういったところのほう話がしやすいということが1つあるのだらうと思うのですね。

AIは逆ですよ。私いつも言うのですが、鬱病1つとっても100人いたら100人違うんですよ。だから、それは1つの方法かもしれないけれど、みんな一人一人事情が違う。ストレス1つとっても、暑いのが物すごく苦手という人、寒いのが苦手という人もいますしね。みんな一人一人違うのです、重みが。

だから、AIでできる部分とAIではできない部分というのがあって。でも、AIで相談して、また来られるということも、例えば、そういった話を聞いてくれるところがあるから、そこで話を聞いてもらいましょうみたいなことがあって、来ている可能性があるのも、そのときに、相談を受けたからには全部応えてあげなきゃいけないというのではなくて、さっき森井さんおっしゃったように、人間全てできるわけではないので、ただ、できることとして、話をともかく聞いて、その上で、どこにつなげるかといったときに、例えば、この中でしたら警察署のほうでは今かなりそういった問題も聞いてもらっていますよとかいうようなことで、あるいは医療機関との格差がすごくあるのですよね、一般の方だと。特に、内科とか外科はそうでもないと思うのですが、精神科という、まだまだ心の病が五大病の国民病の1つになっているといっても、まだまだかなり抵抗を感じる方がいらっしゃるの、なかなかそこに結びつくのは難しいと思うのですが、例えば警察、あるいは未遂だったら消防隊を通じて、また関係機関にねというようところで、我々が相談できる、相談して利用できるネットワークを、むしろ、自分1人で抱え込まないで、信頼のできるネットワークですよ、準公的なね。そういったものがこれからすごく大切になっていくのではないかと思うのですね。

そういう意味では、市役所とかやはり大きいのですよ。市役所の窓口は、死にたくなくなってしまったのだけどという電話相談が恐らく入ると思うんです。だから、市役所の人ゲートキーパーとして、どういうふうにそういう人たちの悩みをともかく、特定の問題ではなく、例えば就職の問題とか家庭の問題とか育児の問題だけじゃなくて、それは窓口としてはやりますけど、どこにどうつないでいったらいいのか。

つなぎ先の支援が、この地域、寒川だけではなくて、もっと茅ヶ崎、藤沢とか、やや広域圏も含めて、あるいは国の機関もあるかもしれません。そういったところにどうつなげていけるかというのが今後の課題。ともかく1人で抱え込んだら大変です。震えが来ちゃいますよ。そう思いますね。

【稲葉会長】 ありがとうございます。本日、議題1つですので、皆様の御意見を聞いてから先進もうかなと思います。今日から御参加いただいています大川委員、全体通じて御質問等、御意見をお願いいたします。

【大川委員】 個人的主観になってしまうのですが、お話を聞いてい

くうちに、ゲートキーパーとして、例えば御近所の方とか知り合いの方とか、お話を聞いてしまって、そのお話が、とても先ほどのように重いお話を聞いてしまった場合とか、そういったときに、どこかもう少し、ゲートキーパーの部分を超えてしまうような感じになってしまったときのためにというか、ゲートキーパーよりももう一つステップアップしたような、ステップアップ講座みたいなものも開いていただけるとありがたいなと思うのです。

私もゲートキーパーの講座を受けたことがあるのですがけれども、その中では、病気に対しても、簡単なものでしょうけれども、御紹介というか、勉強というのは特にはなかったんです。見守って、お声をかけて、お話を聞いて、適切なところに結びつけるということまでということでその講座は終わってしまったのですがけれども、実際そういう場面にあってみると、もうちょっと病気というか、死にたくなってしまうんだよということがどういう原因でそういうふうになったんだということを、病气的なことからアプローチしてみたいなというのは思いとしてありまして、そういう視点で講座みたいなのを開いていただけるとありがたいなというふうに今思いました。

皆さんのお話を聞いていて、皆さん物すごく日頃一生懸命やっっているのですがけれども、一町民としてはまだまだ全然そこまで及ばないので、自分も楽になるように、相手も楽になるようにということで、そういう考えが今浮かんだので、お話しさせていただきました。

【稲葉会長】 どうもありがとうございます。どうしても私、仕事の視点で話していたのですが、そうではない関わりって、いろんな関係性で変わっていくのだろう、家族なのか、お友達なのか、御近所なのか。御近所となると隣からは逃げられませんので、どこまで入ったらいいかというのが、今、委員が言われたように、いろんな課題が出てくるのだろうなというところで、ステップアップ講座ということでの御意見をいただきました。ありがとうございます。

三留委員、すみません、全体として意見ございますでしょうか。

【三留委員】 私の親戚に、数年前に自殺した高校生がいます。突然のことで、遺族は近所にも絶対に知らせないようにして、私たちにもほとんど情報を出しませんでした。しばらくの間、両親や家族はひどく憔悴していましたが、数年経ってようやく元気を取り戻したようです。

どうしてそうなったのかははっきりしませんが、親が本心ではないにせよ「あなたなんて死んでしまえばいい」といった軽い言葉を投げかけたことがあり、その言葉を受けて本人が「自分はいないほうがいいのかもかもしれない」と思い詰めてしまったのではないかと感じています。隣近所や親戚にも内緒にするやり方は疑問で、その子が浮かばれないのではないかと私は思います。

数年経ってから当時のことをもう少し詳しく聞こうと思い、しばらくは静観

していました。身内の出来事に加えて近隣トラブルもあり、私の地域でも同じような問題を抱える人が二、三人いましたが、根が深く簡単には解決できませんでした。ある方は民生委員に相談しても難しいと言われ、それでも時々私に電話をかけてきました。私にできるのは話を聞くことだけで、その方は「このままでは精神的に参ってしまいそうだ」と打ち明けていました。警察に相談しても解決に至らず、誰に相談しても有効な手立てが見つからない状況でした。

私は時々その方の話を聞くだけでしたが、「聞いてもらって気が楽になった」と言ってくれることがありました。しかし最近は連絡が途絶えて、不思議に思っていたら入院していると分かりました。入院中は落ち着いているだろうと、変な言い方ですがずっと入院していたほうが安心なのではないかとも思っています。いつか退院するのだろうと思い、通りかかると、その方は認知症で訪問介護の車が止まっているのを見ることがあります。介護の方とにこやかに話している姿を見てほっとしますが、一方で、近隣トラブルで被害に遭った人たちには十分なフォローが届いていないように感じ、心配です。

私にできるのは時々話を聞くことくらいで、他に何もできないのがもどかしいです。ただ、本人が最近不在のため、ここしばらくは穏やかな日が続いています。同じような近所の問題がいくつか重なり、対応が難しくなっていると感じます。

【稲葉会長】 ありがとうございます。議題1の中で皆様の御意見を聞かさせていただきました。ありがとうございました。

それでは、戻させていただきます、令和8年の事業計画、事務局からお示しいただきました計画につきまして、その他御質問、御意見等ございますでしょうか。大丈夫ですか。先生、よろしいですか。

【桑原委員】 アンケートは今までも拝見して、やはり大切ではないかと思えます。なぜこんなことを聞くのですかという意見から始まって、今こんなことをやっているのだということが、そのことで気づいていただけるというようなことがありますので、ぜひ私としてもゲートキーパーと併せてやっていただければと思うのと、大川さんのほうからお話があったステップアップ講座はなかなか難しいのですけども、何らかの形でぜひ実現できると本当にいいのかなというふうに思います。

大切なのは、身近な人なら誰でもゲートキーパーになり得るということです。ただし、ゲートキーパーが万能というわけではなく、できることとできないことがあります。自分に対応できない場面があっても、「自分がダメだった」と責めないことが大事です。支援を受けられなかった人は「何が悪かったのか」「もっとできたのでは」と自分を責めてしまい、誰にも言えなくなることが多いからです。単に話を聞くことだけでも、本人にとっては大きな助けになります。

また、相談を受けてもつなぐ先がまだ医療機関まで届いていない例が多く見られます。医療と保健、地域との間には深い溝があり、特に精神科分野で顕著です。ここをどうつなげるかが今後の課題だと感じました。

本日は現場の声を直接伺えて非常に有意義でした。事業計画を作ること自体は比較的簡単ですが、それを実際に中身のあるものにしていくのが本当に難しいと改めて実感しました。皆様の意見を聞いてよかったです。

【稲葉会長】 ありがとうございます。そのほかよろしいでしょうか。野口委員、お願いします。

【野口委員】 事業計画11ページのナンバー22、右側の令和8年度実施計画の中で上から3つ目で、企業と高校の情報交換会を実施予定というふうにあるのですが、たしか寒川高校が茅ヶ崎西浜高校と統合されて、なくなる予定と聞いているのですが、ここにある高校というのは寒川高校のことを念頭に置いていらっしゃるのでしょうか。

【事務局】 そうですね。寒川高校が統合されるのが2030年と聞いているのですが、それまではこちらの高校というのは寒川高校ということです。

【野口委員】 ありがとうございます。

【稲葉会長】 そのほかいかがでしょうか。よろしいですか。

それでは、皆様からいただきました御意見を踏まえまして、令和8年度の事業計画に基づいて進めていくということでよろしいでしょうか。ありがとうございます。

様々な意見、今、桑原先生からお話ありましたように、いろんな意見が出ましたので、ぜひ引き続きそういう関連する事業をどんどん盛り込んでいただいて、厚みのあるものに今後していけたらなと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、引き続きまして、2、その他に移ります。委員の皆様から何かございますでしょうか。ないようでしたら、事務局から何かございますか。

【事務局】 1点ございます。皆様、ご審議ありがとうございました。

事務局からの御連絡でございます。来年度の令和8年度の会議は2回を予定しておりますので、委員の皆様どうぞよろしくお願いいたします。

事務局からは以上でございます。

【稲葉会長】 ありがとうございます。これで議題は全て終了しました。

	<p>最後に、皆様からこれだけは言っておこうというところで何かご意見等ございますでしょうか。大丈夫そうですか。よろしいですか。ありがとうございます。</p> <p>それでは、本日の日程を終了とさせていただきたいと思います。進行を事務局にお戻しさせていただきます。よろしくお願いいたします。</p> <p>【瀬戸課長】 稲葉会長、議事進行お疲れさまでございました。</p> <p>皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、貴重なご意見を頂戴し、感謝申し上げます。今後の寒川町の自殺対策推進に皆様のより一層のご協力をお願いしたいと思います。本日はありがとうございました。</p>
<p>配付資料</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・会議次第 ・寒川町自殺対策計画推進協議会委員名簿 ・資料 第2次さむかわ自殺対策計画令和8年度事業計画
<p>議事録承認 委員及び 議事録確定 年月日</p>	<p>・佐藤委員 ・森井委員</p> <p style="text-align: right;">(令和8年4月10日確定)</p>